



光に遇う

本願寺派 布教使 西原 祐治

元旦のことです。妻が「珍しい人から年賀状が届いています」と言いました。

その年賀状は八年前にお浄土へ往った父から、私にあてられた年賀状でした。実は、この年賀状は私が出したものでした。

正月を迎える一週間前のことです。来年は何を大切にして過ごそうかと考えていた時、「そうだ、大切な言葉を、父からの年賀状という形にして自分に届けよう」と思ったのです。そして「珍しい人から……」となったのでした。自分で書いたものではありませんが、書かれています。言葉が浄土から届けられたような気持ちになり、とても有り難い縁となりました。(中略)

おそらく正月に思ったことは、思っただけならば、時の過ぎゆくほどに失念していたのだと思います。しかし、父からの年賀状として届いて見ると、大切な言葉

はいつも私の思いの中にあります。

さてその父からの年賀状には、「ご報謝の一年を送ってください。父 正念」とあります。ご報謝とはお礼するということです。

しかし、お礼や感謝にもいろいろあります。もう三十数年も前のことです。あるご家庭に、法事のご縁をいただいて伺った時のことです。読経を終え、お茶を飲みながら世間話をしていました。すると家の方が、「今の若い人は感謝という言葉も知らない」と言われます。会話の内容は、個人商店であるそのお宅に、高校を卒業した一人の若者が就職してきました。話の流れの中で「感謝なさい」と言われたそうです。するとその青年から「奥さん、感謝って何ですか」という言葉が返ってきたというのです。

私も話題に同調して、感謝ということを知っている側に立ち「そうですね、そうですね」と相づちを打ちました。その相づちを打つ私の心の隅に、感謝の心は良い心、仏さまに近い心という価値判断がありました。

その日、お寺へ帰ってぼんやりしていると、

突然、仏さまからしかられたような感覚をもらったのです。その感覚を言葉にすれば、「お前は勝手だなあ」ということです。何が勝手かといえ、自分に都合がよいと何度でも感謝するが、自分に不利益があったり都合が悪いことであれば、感謝どころではない。それがお前の現実ではないか、ということ。私の感謝についての浅い理解を言い当てられたような気持ちになり、恥ずかしく思いました。誠にその通りです。私が抱く感謝の心は仏さまに近い心どころか、私という我欲、自己中心的な心を一步も離れていないのです。それが私の偽りのない姿だったのでした。

この我欲によった感謝ではなく、すでに恵まれていることへの気づきを縁とした感謝が大切。そして何よりも大事なことは、私の感謝が我欲を一步も離れていないという気づきも、すでに恵まれていることへの気づきも、ともに阿弥陀さまの智慧のみ光によってもたらされるということ。です。

『浄土真宗 やわらか法話3』(本願寺出版社)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



死に目を背ける私

本願寺派 勸学 内藤 知康

仏教が今ここににいる私にとつての問題だというのは、その通りです。

しかし、今ここににいる私は、過去の私、未来の私と無関係に存在しているのではありません。過去の私を振り返り、未来の私を見すえてこそ、今ここにいる私が明確になるのです。

さて、今ここににいる私は生きています。しかし生きていくということと死ぬということと切り離すことができません。仏教では、他と無関係にそのことだけで独立してあるということはありません。仏教では、はあり得ないと考えます。仏教では、親と子とが同年齢であるという言い方がされます。不思議な言葉ですが、その人が親になったのはその子が生まれたからです。つまり、その子が生まれてからの年数と、その子の親になつてからの年数は同じだということ

になります。親と子とが同年齢であるというの、そのことを言っています。親とは何かを考える時に、子を抜きにして考えることはできません。

そして、生きていくということと死ぬということとの関係も、どちらか一方だけを考えることはできないという意味で、親と子との関係と同じです。生きていくものは必ず死にます。決して死なないものは、もともと生きていないものです。美しい生け花は生きていますのでいずれ枯れてしまいます。造花は生きていないので決して枯れません。生きていくものは必ず死ぬというのは、逆に言いますと、必ず死ぬからこそ生きていくのです。

仏教では今ここににいる私を問題にして、今ここににいる私は必ず死ぬ身であるからこそ今生きていくのだと考えます。しかも、善導大師が私たちの命を今すぐ消えるかもしれない風の中の灯火にたとえられたように、私の死はいつおとずれて

くるのかわかりません。また、仏教では念死といつて、自分自身の死を念じることが説かれています。念死というのは、私の首を切る刀が振り下ろされ今や首に触れる寸前という状況を、あたかも現実のように体感することだと言われた先生がおられました。今すぐ死ぬかもしれない私というこのことを見すえてこそ、今生きていく私を本当に見すえたことになるのです。医師の宣告を受けて、余命いくばくもない私ということを見すえてこそ、素晴らしさが本当にわかつたとの体験談もあるようです。(中略)

命終わつてお浄土に生まれるという教えは、否応なく自分自身の死という現実を目を向けさせるといふ大事なはたらきがあることを忘れてはなりません。死後の問題を今の自分自身と無関係な問題と考える人は、実は死を今の自分と無関係と考えているのです。

『どうなんだろう？親鸞聖人の教えQ&A』(本願寺出版社)より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



一日生きれば一日念仏

在家仏教協会 初代会長 加藤 辨三郎

お経には、深い深い甚深無量の真理が説かれていくわけですが、一般人には、たとえば『法華経』八巻を読んでその教えを会得するのは容易ではありませんから、「南無妙法華経」と唱えて一緒に帰依する、それが仏・法・僧に依することだというのが日蓮聖人の教えであろうかと、私は拝察しているわけでもあります。

それと同じことで、私どもの場合は『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経を読んでそれを会得するといつても、とても商売に明け暮れしておる者には時間的にも余裕がありません。そのためにも念仏を称えさせてもらって、周りの人に波紋をおこして流れを伝えていく、これが我々に与えられた役割なのだ

いちばん大切なのは念仏なのであります。私はこうして生命を八十何年ただいておるわけですが、ありがたいのは寿命を一日いただければ、一日法が聞けるといふことであります。そして念仏を称えて、念仏を相続して、どなたかにそれを渡していくことができる、縁をつないでいくことができるということです。

その一日を支えるためには、月給を貰わなければならぬ。働かなくてはなりません。したがって働くこともみな念仏を頂戴するためであります。念仏を頂戴して、念仏を後輩にバトンタッチするために暮らさせていたでいる。

一日でも念仏を称えさせてもらって、それを家内なり、子どもなり、周りの人に波紋をおこして流れを伝えていく、これが我々に与えられた役割なのだ

思うのであります。我々が全部生命絶えたら、念仏も同時に消えてしまします。ですから、念仏者の立場から申しますと、何が大切かという念仏であり、念仏が大事だから生命が大事なのであります。

会社もつぶれないように相続したいのも、念仏を相続させたいがため、会社を発展させんがための念仏ではないのです。つまるところ発展するものもつぶれるのもみな因縁所生でして、はやい話いくら経営に注意しろといったって、地震がくれば、あるいは戦争がおれば、いっぺんにガラガラと崩れていってしまいます。(中略)

そういった、まさに火宅無常の世界に我々は暮らしておるのであります。だからこそ、いつそう念仏のみがまことにおわしますということが、しみじみと実感されてくるのであります。

『阿弥陀経を読む』(佼成出版社)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



自分の心に目を向ける

筑紫女学園大学 元学長 小山 一行

私たちは生まれてこの方、さまざま
まな知識や経験^{けいけん}を身^みにつける中で、
いつの間にか、人生^{じんせい}とはこういうもの
だ、世界^{せかい}とはこういうものだという、
自分^{自分}なりの考えを作り上げて生きて
います。しかし、それは一つの見方^{みかた}
に過ぎないのであつて、視点^{してん}を変え
て見れば世界はまったく違^{ちが}つたもの
となるということには、なかなか気
づけません。(中略)

仏教^{ぶつぎょう}でいう「世界」とは物理的
な空間^{くうかん}ではなく、認識^{にんしき}のレベルを
指^さしているということ。たとえ
ば「財界^{さいかい}の著名人^{ちよめいじん}」などといいま
すが、「経済界^{けいざい}」という場所がどこ
かに存在^{そんざい}するということではないで
しょう。経済にかかわっている方々の
思いの中で感得^{かんとく}されている、共通^{きょうつう}の
理念的^{りねんてき}世界^{せかい}を「経済界^{けいざい}」といつてい

るのです。「芸能界^{げいのうかい}」とか「教育界^{きょういくかい}」と
かいうのも同じことです。私たちは人間
ですから、私の住^すんでいる世界は「人間
界^{かい}」ということになります。その私が家
の中に猫^{ねこ}を飼^かつていれば、「人間界^{じんげい}に猫^{ねこ}
がいる」と見るのが普通^{ふつう}の考えでしょう。
しかし、当^{とう}の猫^{ねこ}にとっては、この世界は
「猫界^{ねこかい}」なのであつて、その猫界^{ねこかい}に人間
がいると見ているのではないでしょう。か
が仏教^{ぶつぎょう}が求^{もと}めているのは「転迷開悟^{てんめいかいご}」で
あるといわれます。すなわち、迷^{まよ}いの世
界を離^{はな}れて悟^{さと}りの世界に至^{いた}ろうというの
が仏教^{ぶつぎょう}の大原則^{だいげんそく}なのですが、それは「迷
いの世界^{せかい}」と異なる「悟^{さと}りの世界^{せかい}」が
どこかにあつて、そこに出^でかけていくとい
うことではありません。

身勝手^{みがたて}な思いにとらわれて、自分の思
いが満^みたされると有頂天^{うちやうてん}になり、思い
通りにいかななくなるとイライラして他人^{たにん}
を責^せめ、愚痴^{ぐち}をこぼしながら生きている。
そういう堂々^{どうどう}めぐりの状態^{じょうたい}を迷^{まよ}いの世

界^{かい}というのは、その迷^{まよ}いを「転^{てん}」じる
というの、迷^{まよ}いが消滅^{しょうめつ}するという意味
ではなく、もの見方が転換^{てんかん}するという
ことです。仏の教えを学ぶことによつて、
迷^{まよ}いを作り出していたのは自分自身の心
であつたことに気づく時、その身勝手な
自分^{自分}を包^{つつ}んでいる大きな恵^{めぐ}みの世界を感
じる眼^{まなこ}が開^あけてくるのでしよう。

弘法大師^{こうぼうだいし}(空海^{くうかい}) 真言宗^{しんごんしゅう}の
開祖^{かいそ}・八三五年寂^{あは}れの著^あられた
『般若心経秘鍵^{はんにやしんぎょうひけん}』という書物^{しょぶつ}には、
仏法^{ぶつぽう}遙^{はる}かにあらず、心中^{しんちゆう}にして即^{すなわ}ち
近^{ちか}し。真如^{しんによ}ほかにあらず、身^みを捨^すてて
いづくにか求^{もと}めん。迷^{めい}悟^ごわれにあれば、
発心^{ほつしん}すれば即^{すなわ}ち至^{いた}る。
と述べられています。仏教^{ぶつぎょう}が指^{しめ}し示^{しめ}
す真理^{しんり}は、自分の外^{ほか}に向^{むか}つて求^{もと}めていくの
ではなく、私たち自身の心のありようの
中^{なか}にあるというお示^{しめ}しでしょう。だから、
さとりの道^{みち}は、外^{ほか}の世界^{せかい}を見ている自
分の心^{こころ}に、目を向^{むか}けることから始^{はじ}まるの
です。

『新々^{しんしん}みちしるべ しあわせ』(仏教伝道協会) より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



無常

本願寺派 勸学 内藤 昭文

祭りの華やかさに無常を観るとい

うことはなかなか難しいことでは

う。例えば、満開の桜を見て、「き

れいだなあ」という思いはあるでし

う。しかし、そこに「無常」を観

ることはありません。満開の桜が散

る時に初めて無常を感じます。そ

れが一般的でしょう。祭りの後の寂

しさと無常も、桜が散った時に感じ

るものと同質でしょう。しかし、実

は満開の桜の姿に無常を観ることが

実は盛り上がった祭りに無常を観

ることなのです。

私たち人間も、自分が元気な若

い時に、なかなか人生の無常を観

じることはありません。やがて歳を

とり、自分の歩んできた人生を振

り返る時に、わずかながらでも人

生の無常に思いをめぐらすのではな

いでしょうか。これも、桜が散る時の、

祭りの後の、無常と同じです。私たち

はえてして若い時には仏法を聞こうと

しません。それは若さにまかせて、こ

の若さが永遠に続くと思覚している姿

でしかありません。盛んなる時、その

盛んなることは何等の基盤もないもの

であること、つまり無常であることに気

が付かないのです。(中略)

「盛り上がった祭りを見て、無常を観

じる」というと、なにかしら消極的で、

悲壮なイメージもあります。しかし、

そうではなく、逆に祭りが無常である

ことを観るということは、その無常な

る祭りが今盛大に行われることが有難

いことであり、素晴らしいことだとい

ことになるのです。一夜明けると、こ

の盛りあがった祭りがウソのようにな

なるのですが、なくなったことを寂しく

思い、悲しむのではなく、無常である

祭りが今盛大に行われることを喜ぶこ

とができるのです。この私の命、この若

さが、実は一夜明けると、どうなってい

るか分からない無常なるものであるから

こそ、今まさに生きていることの有難さ

や喜びがあるのです。確かに、予期せ

ぬ死、不条理の死を目の当たりにする

と何かと割り切れぬ気持ちになります。

しかし、そこには必ず何等かの因縁があ

るのです。『仏弟子に学ぶ』(本願寺出版社)より引用

一部を中略してご紹介しています

平成二十三年より、当西照寺のご

法座ならびに研修会にご出講いただいた

ている、大分県中津市法行寺ご住職の

内藤昭文和上ですが、この度司教か

ら勸学に昇階されました。勸学とは、

学階と呼ばれる教学知識を示す五つの

階位の最上位に位置し、教学を深く

研鑽されて他の僧侶の指導的立場にあ

り、宗門内での教学的問題に対して答

える役割を担う方のことです。ちなみ

に、九州では内藤和上を含めてお二人

しかおられないはず。住職



仏壇じまい

行信教校 校長 天岸 淨圓

「墓じまい」の言葉が一般化し、それに伴う再納骨の量が増大し社会問題となつている。永代供養なのか遺棄なのか。さらには「仏壇じまい」の語も一般化し始めているようだ。家族の形態、生活環境の変化も理解できるが、宗教全般に対する不信か、確実に敬虔に手を合わせる人が少なくなっている。

先日、新聞の読者の意見欄に「仏壇じまいに賛成」の声があつた。「故人を偲ぶには仏壇でなくても良い。それぞれの偲び方があつても良い」という内容だ。多くの人びとには「仏壇」は「故人」を偲ぶためのものであつて、そこに「仏さま」を拜むという意識は具わつてない。辛うじて仏壇はあるが仏教信者はいない状況と言わねばならない。

我国は仏教国を自称している。しかし「仏さま」を拜むことを忘れた仏教とはいかなるものか。「死者供養」を追いかける伝統仏教、メディアを通じて「金運」「パワースポット」を声高に叫ぶ僧侶、どこにブツダの精神が生きているのか。

親鸞は自身のプライベートを語らなかつた。ただ、残された法語は人びとに強い響きを与える。中でも『歎異抄』の表現は格別と言える。その一つに親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。という言葉がある。この言葉だけを聞くと、親鸞は死者供養を厳しく拒絶したかに思われる。だが、親鸞はつづけて、そのゆるぎは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれも、いづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。『歎異抄』第五条）と語っている。

親鸞は供養すべきは自分の父母だけではない。もちろん人間だけではない。生きとし生ける全てものにおよぶべきだと言っている。思うに親鸞はどれほど豊かな命のつながりの中で生かされていたのだろうか。「本当に限りない善意と愛情と犠牲の中を生かされて来た」。その実感がなければ出ない言葉である。

仏壇を自身に縁の深い人を偲ぶ場と考えている人びとには、自分がどれほどの命によつて生かされて来たかを感じることがはむずかしいようである。さらに（中略）「仏壇じまい」の言葉には、自分は「自分で生まれて、自分で育て、自分で生きてきた。だれの世話にもなつていないし、なりたくない」という強烈な「個」の意識が感じられる。翻つて限りなく豊かな境遇に今日まで育まれ、抱かれつづけて来たのかを感じできない生き方に深い悲しみを持つ。やがて自分に訪れる「終わられる」日の虚しさを知ることになるであろう。

『道しるべ』（一味出版）より引用 一部を中略してご紹介しています